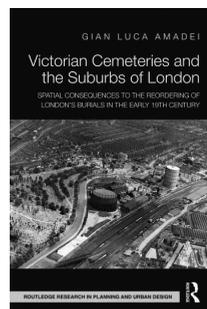


書 評

Gian Luca Amadei, *Victorian Cemeteries and the Suburbs of London: Spatial Consequences to the Reordering of London's Burials in the Early Nineteenth Century*

(New York and London: Routledge, 2022)

芝 奈穂 (愛知学院大学)



本書は、ヴィクトリア朝における共同墓地建設が、ロンドンの都市化および郊外の発展においていかなる役割を果たしたかについて、社会的文化的コンテキストから探究した書である。著者 Gian Luca Amadei は、The Royal College of Art in London で教鞭を執りながら、建築およびデザイン分野のジャーナリストとしても活躍する新進気鋭の研究者である。とりわけ、ヴィクトリア朝の墓地や「死の文化」(death culture) についての複数の論考が注目される。

ヴィクトリア朝は人口増加とともに、都市が爆発的な発展を遂げた時代であり、それは必然的に死者の増大をも意味した。往時、死者は都市の教会墓地に埋葬されるのが一般であったが、土地の払底を来たし、その非衛生的な状態が大きな社会問題となったことはよく知られている。ヴィクトリア朝を象徴する「過密」なる語は生者のみならず死者にもあてはまったのである。この喫緊の課題を解決するに与って力のあったのが、複数の民間共同墓地会社によってロンドン近郊に設置された共同墓地である。この時代の墓地に関わる研究には、たとえば、上述の衛生問題との関連を述べたもの、墓地内のチャペル等の葬祭建築や墓地の景観をデザインの観点から考察したもの、さらには、共同墓地会社について探究したもの等々が存在する。

それらに比して、本書の主眼は、共同墓地がその周囲の発展にいかに関与を与え、さらには19世紀を通じて、郊外の成り立ちおよび空間形成にまでいかに寄与することになったかの点を追究するにある。すなわち、共

同墓地をアーバン・スタディーズ (Urban Studies) という大きな枠組みで捉えていることに特色があり、本書の副題からも、本書が出版社 Routledge による「Routledge Research in Planning and Urban Design シリーズ」の一書であることから、その点は容易に読み取れるのである。

本書は序論および全6章から成る構成を取る。概観するに、ロンドン郊外に建設された複数の共同墓地のうち、Kensal Green Cemetery、Highgate Cemetery、および、Brookwood Cemetery の三つがケーススタディーとして取り上げられており、第3、4、5章を占めて本書の中核をなす。先立つ章においては、まず第1章で、19世紀初期のロンドンに共同墓地が必要とされるようになったその歴史的コンテキストが、医学界からの提言や慈善家らによる社会改良運動、Edwin Chadwickたちを中心とした衛生改革、そして、墓地に関する立法等のトピックを通して述べられる。続く第2章では、共同墓地会社がいかにして設立され、個々の共同墓地がいかにして建設されるに至ったかの経緯が運営方法や実際の建築過程および墓地のデザイン等の分析を通じて論考される。共同墓地会社は概ね、利益追求の資本主義的運営理念に基づき、主に中流階級の顧客を対象としたが、同時に公共的に利用できる施設建設を目指したありようも描写されている。最後の第6章は19世紀末から20世紀初頭にかけて、それらの共同墓地が余地を失い、再び過密状態が議論されるようになった際、再度、医学界や社会改良家たち、さらには都市計画家たちからどのように批判されたかについての論述がなされている。

上述のほかにも、本書は様々な交通機関や産業形態、公共施設、アメニティ整備等を含めた広範囲にわたるトピックを絡めた大きな空間的テーマを扱っている。また、時代的にも1830年代から1900年代までとヴィクトリア朝全体をやや越える長い期間を設定していることも指摘しておかねばならない。その論理的アプローチは、Foucaultの社会理論をはじめ、David HarveyやRichard Dennis等の地理学者の理論、およびHarold J. DyosやDonald J. Olsen、Asa Briggs、Roy Porter等の都市史研究者たちの理論を随所に引用していることから、都市研究および空間研究に裏打ちされているものと言える。

さて、本書の意義について、以下、三点を列挙しておきたい。第一に、

共同墓地と郊外発展との関わりにおける事例と論理の運びが鮮やかであること。これまでも、工場や港湾等の産業、運河や鉄道をはじめとする交通機関、博物館や劇場等の教育娯楽施設、および植物園や公園等のオープンスペースが、いかに都市の発展に寄与したかという研究は各方面にあったが、墓地を中心に据え、墓地がいかに郊外における都市化の「ジェネレーター」(“generator,” p. 64) となったのかというユニークな視点の提示は今までになかったことであり、刮目すべきと言えるだろう。どのケーススタディーにおいても、起爆剤としての共同墓地がそれぞれの地域の発展に貢献した過程が見事に描写されている。1833年に建設された Kensal Green Cemetery と 1839年に建設された Highgate Cemetery は、いずれもロンドン近郊に位置するが、墓地の存在により、その周囲には様々な建築物や産業が発展する兆しを見せた。前者の場合は、教会が建設され、墓地を基盤とする洗濯業および葬祭産業も発展し、同時期に墓地の南側に建設されたリージェンツ運河や鉄道線路が開通するに至り、最終的には墓地周囲に住宅地開発も行われたのである。後者は、ロンドンの中心地を一望できる景観美で名を成したハイゲート村に位置し、当初は墓地に対する風当たりが強かったことから、墓地内の建築物や風景づくりに最大限の努力が払われた。その結果、当該墓地は名声を得るようになり、隣接する敷地にはウォーターロウ・パークが整備され、また、セント・パンクラス病院も墓地周辺に建設されるに至り、その後、周囲に大規模な住宅地の開発が進んだ。これらに遅れて、1854年に建設された Brookwood Cemetery は、ロンドンから距離がある農村地帯に位置している。この距離的難を補うため、当該墓地を運営する The London Necropolis Company はロンドンのウォータールー駅に自社のオフィスと礼拝堂、遺体安置所および専用の線路等を構え、文字どおり、棺と葬儀参列者の両者を鉄道でロンドンから当該墓地の入り口まで運んだのである。これ自体、非常に興味深いアイデアであるが、当該墓地会社は、その後、精神病院の建設やゴルフコースの開発に間接的に関わり、最終的には、墓地周囲の住宅地開発には直接的に関与している。日本では墓地が、薄暗く陰気な場所で近づき難い所と目されているのと比較するならば、著者の切り口を通して、墓地が創り出すその価値観の見事さと住宅地建設のビジネスも一緒に立ち上げるそのしたたかさが感じられた。

これらのケーススタディーにおいて、事例として取り上げられた墓地周囲の施設には、監獄や市場、精神病院、学術研究所、ガスタンク等も含まれ、若干、多岐にわたりすぎるきらいがないではないが、病院や公園、住宅地開発等のアメニティ整備が、墓地を中心に据えて行われたこと、そして、Brookwood Cemeteryに至っては、墓地会社自体が土地開発の担い手であったということは極めて示唆に富む。著者は当該墓地について、「隔離されたままにするのではなく、生者のための住居と死者のための安息の地の両方を提供しながら、ロンドンの新しい衛星都市における不可欠な構成要素となった」と述べる (p. 137)。本書において著者が最も主張したかった点ではないかと思われる。

本書の意義の第二であるが、ケーススタディーとしての三つの墓地の選択の仕方にも工夫が見られる点である。当時、1833年に建設された Kensal Green Cemetery を皮切りに、Highgate Cemetery も含め、約10年間で、ロンドン近郊に「壮大な7つの墓地」(“the Magnificent Seven”) と呼ばれたものが建設された。これに対して、Brookwood Cemetery は現在の行政区分で言うところのグレーター・ロンドンの圏外に位置する。ケーススタディーとして、ロンドン近郊の7つから選ぶことも可能であったわけであるが、著者はあっさり捨象している。したがって、墓地の選択が少々恣意的であるとする見方ができるかもしれない。しかし、著者は序論で、異なる種類と場所の共同墓地にも目を向ける必要があることを述べており、また、Brookwood Cemetery が甚だ特異な例を提示していることからして、この選択に至ったと見てよさそうである。

最後に本書の意義の第三であるが、本書の扱う時間枠の長さを指摘したい。前述のとおり、本書は1830年代から1900年代までを網羅している。本書の第1～5章までは、ヴィクトリア朝の初期に建設された共同墓地が、その後半において、いかに郊外の発展を促したのかというテーマに沿っているのに対して、最終章では、19世紀終わりから20世紀最初にかけて、再び過密状態となった共同墓地に対して湧き起こった様々な批判に焦点が当てられ、時間枠が拡大されている。しかも、共同墓地に対する批判の一つとして、その伝統的埋葬方法、すなわち、土葬についても触れられており、そこから、火葬への変更への道程も示唆されている。現在、イギリス

は70%程度が火葬であり、その現状に鑑みるならば、ヴィクトリア朝の共同墓地のあり方も変化の波から逃れることはできなかったと言えるであろう。

第6章において、20世紀最初までに時間枠を拡張したのは、Ebenezer Howardの「田園都市」(Garden City)構想との関連づけを図ったからと指摘したい。著者はDyosやBriggs、Porter等を引用しながら、ロンドン概して抜本的な整備計画というものなしに、散発的に発展してきた歴史があることを繰り返し述べ、ケーススタディーで取り上げた墓地も例外ではないという立場を取る。にもかかわらず、墓地が周囲の発展に大きく寄与した点を評価する。それに対して、20世紀初頭のHowardの田園都市構想は、その世紀を通じて都市計画に大きな影響を与えた重要な事例である。ところが、著者は、Howardのヴィジョンには、墓地や埋葬に関する概念がわずかしか述べられていないと論じている(p. 171)。この問題提起については、後日の研究が必要になるだろうが、共同墓地をめぐる郊外開発において、死者の空間が生者の空間造りの中に組み込まれていたのに反し、著名な田園都市構想には、死者の安息の地への配慮があまり顧みられていないとする著者の指摘は正鵠を射ている。著者が第6章を本書に含めた理由はこのあたりにあるのかもしれない。

複数の文書館や図書館からの貴重な地図や設計図、イラスト等も多数、掲載した本書は、アーバン・スタディーズ、とりわけ、郊外の発展や都市計画史を研究するものにとって必読の書となるだろう。また、本書は社会的文化的コンテキストのもとに、監獄、病院、住居、オープンスペース等の幅広いトピックを分析しており、ヴィクトリア朝文化の研究者に参考となる論考を多々提供している。冒頭で述べたように、ヴィクトリア朝は死が日常に影を落としていた時代であり、その時代を研究する者にとって、「死の文化」を無視することはできない。墓地が郊外の発展に寄与し、最終的には都市化の一端を担ったという結論の根底に流れるのは「結局、生者と死者は再び互いに近接することとなった」(p. 3)という著者の哲学的とも言える思考であろう。この言葉に、「死の文化」に対する著者の造詣の深さを感じずにはいられなかったことを最後に付け加えておきたい。